

21. 40歳未満若年層におけるメタボリックシンドロームの新規発生率：大規模コホート研究

獨協医科大学医学部公衆衛生学講座

春山康夫, 西連地利己, 梅澤光政, 長尾匡則, 小橋 元

【目的】平成20年からわが国が始まった特定健診・特定保健指導はメタボリックシンドローム (MetS) の該当者を減らすことにより生活習慣病の発症予防及び国民医療費削減が期待されている。現在 MetS に関して性・年代別の MetS 保有率は報告されているがその発生率はまだ明らかではない。本研究では若年成人を含む各年代層の MetS 新規発生率を明らかにすることを目的とした。

【方法】都内某健診センターにて平成20年より連続2年以上健診を受診した20~74歳の94,812人のうち、MetS 該当者 (9,514人) 及び MetS 診断項目の欠損値 (6,158人) を除く、79,140名 (男性56,210人, 女性22,930人) を観察対象とした。研究デザインは前向きコホート研究を用いた。観察対象を男女20~39歳 (若年群), 40~64歳 (中年群), 65~74歳 (高齢群) の3群に分け、6年間の MetS の新規発生を追跡した。MetS は日本内科学会等8学会の診断基準を用いた。男女別の年齢3群における発生率について、Kaplan Meier 法及び喫煙、飲酒、運動、食習慣、睡眠を調整した Cox 比例ハザードモデルにて検討した。

【結果】各群の新規 MetS 発生率 (1,000人年) は、男性で若年群37.7, 中年群71.6, 高齢群85.5, 女性で若年群4.4, 中年群12.5, 高齢群27.5であった。年齢3群に関する MetS 累積発生率の違いが男女別にそれぞれ有意に認められた (Log Rank; $p < 0.001$)。喫煙、飲酒、運動、食習慣及び睡眠の生活習慣を調整した Cox 比例ハザードモデルの分析では、中年群に比べて MetS 新規発生率の調整ハザード比 (95% CI) は若年群で男性0.52 (0.50-0.54), 女性0.35 (0.29-0.42), 高齢群で男性1.23 (1.13-1.35), 女性2.17 (1.63-2.88) であった。

【考察と結論】若年成人の MetS 発生率は男性で中年の52%, 女性は35%であった。加齢の以外に若年成人の運動と食習慣が良好ではないことが MetS 発生の要因であると考えられる。今後、特定健診・特定保健指導の対象者は40歳未満の若年層を含む必要性が示唆された。

22. 頭頸部皮膚浸潤癌症例に対する当科での治療

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

後藤一貴, 金谷洋明, 今野 渉, 平林秀樹, 春名真一

【はじめに】頭頸部癌患者において、手術不能な大腫瘍や治療後の再発腫瘍など局所制御が困難になると、腫瘍の皮膚浸潤、自壊からの出血や滲出液、壊死や感染による悪臭などにより患者の QOL は著しく低下する。それに対し Mohs 軟膏を用いた chemosurgery の有用性報告されている。頭頸部領域では、2009年に南ら¹⁾、山中ら²⁾ が報告している。

症例1 91歳 女性

平成X年、甲状腺乳頭癌 (cT3N0M0) の診断にて甲状腺部分切除術後の再発。左頸部に自壊し出血を伴う隆起した腫瘍を認めた。Mohs 軟膏処置を入院にて行い腫瘍の著明な縮小を認めた。処置中の痛みには、NSAIDs の処置前投与やキシロカインスプレーによる表面麻酔にて処置を遂行することが可能で終末期を自宅にて過ごすことができた。

症例2 62歳 男性

平成Y年、喉頭癌 (cT40N1M0) にて集学的治療を行うも、左頸部リンパ節に再発。腫瘍は自壊し多量の滲出液・悪臭のため入院した。潰瘍状で総頸動脈が近接し、Mohs 軟膏を長時間作用させることは困難で、硬化は不十分であった。

【考察】減量が目的であれば、1~2時間 Mohs 軟膏をあて、毎日繰り返すことが安全であった。また、滲出液と混ざり合うと Mohs 軟膏が柔らかくなり健常部位に垂れ込んでしまうので Mohs 軟膏は硬めに準備することで安全性が増すと考えられた。潰瘍状の病変や潰瘍状の病変では十分に作用させることはできず処置には限界があると考えられた。

【結語】隆起型病変では有効だが、潰瘍型病変では十分な効果は得られなかった。終末期の QOL 改善に有効な症例もある。

参考文献

- 1) 南 和彦, 他: Mohs 軟膏を用いた頭頸部腫瘍の出血、疼痛制御. 日耳鼻 **112**: 550-553, 2009.
- 2) 山中敏彰, 他: 緩和医療における Chemosurgery の施行例. 頭頸部癌 **35**: 322-327, 2009.
- 3) 重山昌人, 他: 各種疾患に対する特殊院内製剤設計と臨床応用. 医薬ジャーナル **41**: 2289-2294, 2005.